

シリーズ「遺跡を学ぶ」

154

八ヶ岳を望む

縄文集落の復元

梅之木遺跡

佐野 隆

新泉社



八ヶ岳を望む 縄文集落の復元 ―梅之木遺跡―

佐野 隆

【目次】

第1章	縄文集落がみつかった	4
1	梅之木遺跡の発見	4
2	保存か開発か	9
第2章	リアルな縄文集落を求めて	13
1	梅之木遺跡の発掘調査	13
2	縄文中期の環状集落だ	16
3	川のほとりの活動域	21
4	縄文の「道」みつかる	26
第3章	梅之木縄文ムラの生活を追う	37
1	ムラの生活を支えた道具	37
2	磨製石斧はどこから来た?	45
3	土を洗う	50
4	土器に残された圧痕	56
5	どこへ行った? 梅之木の人びと	63
第4章	新たな住居像を求めて	69
1	みんなでつくる縄文ムラ	69
2	竪穴住居をどう復元するか	72
第5章	生きている史跡	90
参考文献		93

編集委員
勅使河原彰(代表)
小野 昭
小野 正敏
石川日出志
小澤 毅
佐々木憲一
装 幀 新谷雅宣
本文図版 松澤利絵



図1 ● 梅之木遺跡の景観

上：茅ヶ岳山麓、梅之木遺跡から西方の眺望。南アルプスが目の前に広がる。
下：休火山金ヶ岳と茅ヶ岳の西麓、標高800mに梅之木遺跡がある。

第1章 縄文集落がみつかった

1 梅之木遺跡の発見

さわやかな風が吹く丘

茅ヶ岳^{かがたけ}西麓は気持ちのよいところだ。標高八〇〇メートル前後の丘陵地からは西に南アルプスが広がり（図1上）、北には八ヶ岳、南には富士山を望む。東をふりむくと金ヶ岳^{かながたけ}と茅ヶ岳がそびえる。

ここは山梨県北西部の北杜市^{ほくと}明野町^{あけの}。なだらかな山麓斜面には畑地がつづく（図1下）。集落は控えめに点在し現在の人口は四八〇〇人ほど。一〇月になると農家の人たちが特産の浅尾ダイコンを忙しく収穫し、さわやかな秋風が労をねぎらう。地形に逆らうことなく開かれた畑地は江戸時代に開墾され村人たちが営々と耕作してきた。しかし農業の機械化、経営の規模拡大に対応できなくなり、一九九〇年代をむかえるころ大規模な土地改良事業が計画された。

こんな光景はみたことない
二〇〇三年初夏、以前から土器片などがみつかっていて「梅之木遺跡」として知られていた場所に土地改良事業の工事が迫ってきた。すでに二〇〇一年冬から梅之木遺跡の一角で発掘調査がはじまり、平安時代の集落跡が確認されていた。二〇〇三年もつづいて平安時代集落を発掘調査するつもりだった。

ところが発掘をはじめてみると、平安時代の竪穴住居はわずかだけ。かわりに円形の落ち込みが つぎつぎとみつかった(図3)。平安時代の竪穴住居の平面形は方形。円形の竪穴住居となると縄文時代の遺構である。縄文時代中期の土器もたくさん出土していた。注意して掘りすすめると遺構が重なりあっている(図4)。住居跡が一〇〇メートルほどのドーナツ状にならん



図3 ● つぎつぎにみつける竪穴住居跡
白い丸が直径5m前後の竪穴住居跡。小さな丸は土坑。遺跡の左側、林のなかを湯沢川が流れる。中央広場には縄文時代の遺構がない。

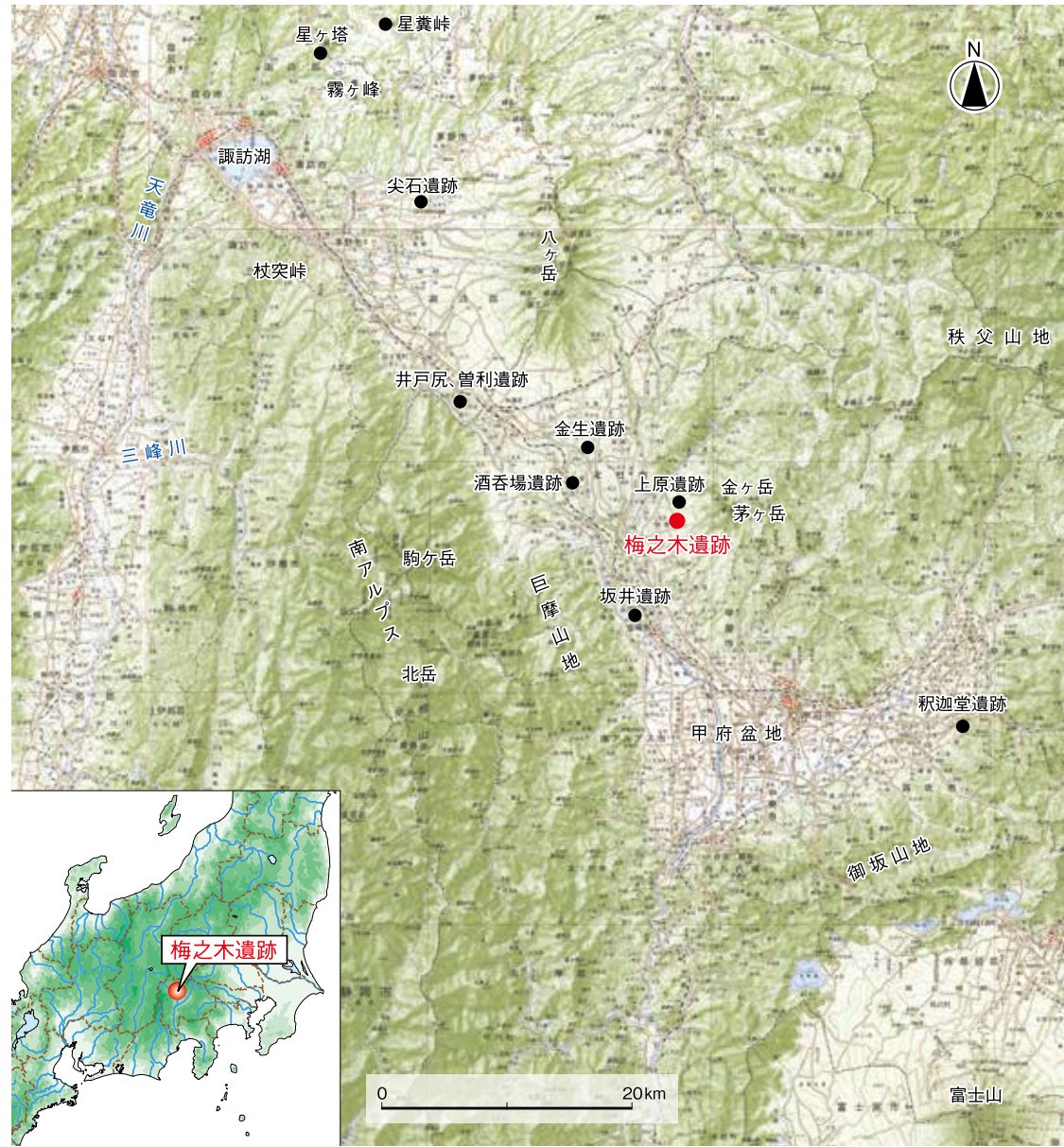


図2 ● 梅之木遺跡周辺地図
梅之木遺跡は茅ヶ岳の西麓、標高800mにある。霧ヶ峰の黒曜石原産地まで直線距離で約50km、三峰川の石斧製作遺跡まで約35kmである。

でいる。これは縄文時代中期の環状集落だ。縄文時代の集落跡が壊されることなく残され、眼前に広がっている。縄文遺跡の発掘には慣れているが、こんな光景はみたことがない。

発掘すべきか？

発見された縄文時代の住居跡は一〇〇軒を優に超える。遺構確認面は長年の耕作で乱れ、住居跡が重なりあっているから調査はむずかしそうだ。平安時代集落の残りを発掘するつもりであったから、調査期間も予算もまったく不足している。旧明野村の大柴邦昭村長（当時）は郷土の歴史と文化を大切にする人で、地域の誇りになるような史跡がほしいとよく話していた。二〇〇三年、大柴村長はすでに退任し篠原真清村長が就任していた。

ほぼ完全な形で残されている環状集落は、明野村はおろか山梨県内でも二度と発見されないかもしれない貴重な遺構である。土地改良事業を推進するために発掘調査すべきか、それとも遺跡を現状保存すべきか。文化財担当者ひとりで決められることではない。



図4 ●住居の重複
縄文時代の住居跡は激しく重複している。

2 保存か開発か

優良農地でみつかった環状集落

農業は明野村の基幹産業である。高度成長期以降、専業農家が減りつつあったが農業は依然として重要な地域産業であり、農家は先祖から受け継いだ農地を荒廃させずに子孫に引き継ぐことを望んでいた。土地改良事業は、江戸時代以来の不整形な農地と複雑に入り組んだ権利関係を清算して広くかたちが整った農地に改良し、かつ灌漑設備を整備する事業である。

火山性丘陵地に立地する明野村は水利の便が悪い。安定した水利をとまなう畑地の造成は、江戸時代から水利の便の悪さに苦しんできた農家の悲願でもあった。梅之木遺跡が発見された畑地は、最上級の浅尾ダイコンが育つ、山麓きつての優良農地であるという（図5）。地元農家は、畑一筆ごとにダイコンの品質が異なることを理解している。よりによって最優良農地で環状集落がみつかってしまったのだ。



図5 ●ダイコン畑の風景
特産浅尾ダイコンを栽培する畑が広がる。夏から秋にかけての山麓の風景である。写真後方の山は金ヶ岳（左）と茅ヶ岳（右）。

産業廃棄物最終処分場

過疎高齢化に悩む明野村は、農業の将来に限界も感じていた。南アルプスを臨む風光明媚な景観に地域振興の活路をみいだそうと、県営花き栽培試験場、通称フラワーセンターの誘致、温泉保養施設の建設を進めていた。そして、そうした観光施設と引き換えなのか、明野村は公共関与の産業廃棄物最終処分場の受け入れを求められた。

産業廃棄物の自県内処理は山梨県の重要課題。建設候補地は梅之木遺跡の北を流れる湯沢川（湯沢）の谷と決められると、村民を二分する激しい議論がわきあがった。梅之木遺跡は不穏な雰囲気の中、処分場候補地のすぐ隣で発見されたのだった（図6）。

悲願の中期遺跡保存

優良農地と産業廃棄物最終処分場、そして

突如、出現した縄文時代の環状集落跡。梅之木遺跡の発見は地元紙記者の目にただちにとまった。記者の関心は遺跡の重要性もさることながら、遺跡の発見が処分場建設にどう影響するかにもあったのだろう。

遺跡発見の報道を受けて、山梨県考古学協会がいち早く保存運動に動いた。長野県と競いあうように縄文王国を自称する山梨県だが、典型的な縄文集落遺跡は保存されていなかった。同じく北杜市にある金生遺跡（きんせい）がすでに史跡指定されていたが、縄文時代晩期の特殊な性格を帯びた遺跡で、保存された面積は限定的だった。土偶一一一六体が出土した釈迦堂遺跡（しやかどう）は甲府盆地東部の代表的な中期集落跡で、発見当時、熱烈な保存運動が展開されたが、中央自動車道建設という国策的事業の前に保存は実現しなかった。

こうしたいきさつがあって、縄文時代中期の典型的な集落跡を保存することは山梨県考古学関係者の悲願といえ、梅之木遺跡は、悲願達成の最後の機会ととらえられた。地元では郷土研究会が中心となって遺跡を保存するための署名運動がはじまった。署名運動は廃棄物最終処分場の反対運動とも絡み合いながら、しかし静穏に進められ、人口わずか四八〇〇人の小さな明野村で三七六〇人分の署名が集まった。

平成の大合併

梅之木遺跡をめぐる情勢をさらに複雑にしたのが、平成の大合併である。明野村を含む旧北巨摩郡九町村（きたこま）で一九九八ごろから合併が話題にのぼりはじめ、二〇〇三年には明野村をはじめ



図6 ● 梅之木遺跡と処分場

写真中央上方から斜め左に流れる湯沢川の対岸（写真上方）には古墳時代と平安時代の集落跡が発見されたが、記録保存の発掘調査を実施した後、産業廃棄物最終処分場が建設された。

め七町村が合併協議会を発足させた。合併後の市役所庁舎の位置、首長選挙、市議会議員選挙、町村間の主導権争いと駆け引き。行政関係者、住民の思惑が交錯した。

国史跡に値するか

梅之木遺跡の保存に慎重な意見もあった。二〇〇三年一月、梅之木遺跡が発見されたばかりの段階では、梅之木遺跡は環状集落である、という情報しかなかった。中部地方から関東地方の縄文時代中期にあって環状集落は一般的な集落形態である。山梨県でも釈迦堂遺跡、桂野遺跡、酒呑場遺跡、原町農業高校前遺跡、甲ツ原遺跡、寺所第2遺跡、平林遺跡、諏訪原遺跡などの環状集落が調査されていた（図35参照）。

遺跡保存には土地の購入費、史跡整備費など多額の経費がかかる。広い遺跡を保存するためには国史跡の指定を受け、国補助金に頼るしかない。しかし、青森県の三内丸山遺跡が縄文時代遺跡の代表とみなされていた当時、環状集落というだけで国史跡になるのかと疑念を抱くのは、国史跡の「相場感」に照らして当然のことである。土地改良事業、産業廃棄物最終処分場、町村合併の重要施策に照らして、梅之木遺跡は保存に値するのか。文化財としての価値の証明が強く求められた。